

# 夫婦関係と養育態度

永井 暁子  
(東京大学)

The Analysis of Marital Relationship and Parent's Rearing Attitudes

NAGAI Akiko

親の養育態度に影響を及ぼす要因に関して、NFRJ03 を用いて探索的な分析を行った。本論では、親の養育態度の中でも虐待傾向、とくに心理的虐待傾向に着目した。虐待傾向は男女で異なり、子育てに深く関わっている女性の方が虐待傾向も強い。さらに役割ストレーンならびに夫婦関係と虐待傾向が関連していることが明らかとなった。男性は仕事の負担が大きい、職場で理解されていない、家族のことで仕事の時間がとれないことが虐待傾向を強め、夫婦関係満足度が低いほど、虐待傾向が強まる。女性は、子どもや家族のことで悩んだり、家族から理解されていない、家庭内での負担が重いほど、夫からの情緒的サポートが少ないほど、夫婦関係満足度が低いほど虐待傾向が強い。性別役割分業の中で男女それぞれに課されている負担やそれによるストレスが、弱い立場にある子どもに向けられていることが示唆された。

キーワード：養育態度、虐待傾向、夫婦関係

## 1. 本論の目的

子育てへの社会的関心は高く、また、近年の子どもの発達への不安感の高まり、子どもへの虐待が深刻視される中での社会的な要請などの理由から、親の養育態度や子どもへの虐待に関する研究が増加し、その研究結果が注目されている。

これまでの子育て、養育態度、虐待に関する調査の多くは、特定の対象に限定されてきた。それらの調査項目は子どもの年齢によって異なっているということや、心理学からのアプローチが中心であったことなどが、その理由であると思われる。詳細、緻密な調査分析が必要とされる一方、日本の家族問題の中で子育て、養育態度、虐待を捉えるならば、全国規模のランダムサンプリングによる家族調査データから、それらについて分析を行うこともまた必要であろう。なぜなら、生活問題を抱えやすい階層の人たちには、しばしば子どもへの虐待の目が向けられてきた。それはそれらの層の人々がもともと社会の管理下におかれる場合が多いからであると、コービーをはじめとした研究者は指摘している (Corby 2000 = 2002)。したがって、本論では、NFRJ03 データを用いて、虐待傾向に関する探索的分析を行うこと、さらに全国規模の一般的なデータでこのような問題を扱うことの妥当性を検討することを目的としている。

## 2．既存の研究と分析課題

養育態度に関する研究では、親の養育態度が子どもの発達に及ぼす影響、親の養育態度の規定要因、さらには子どもへの虐待やそれにかかわる因果関係についての調査、分析が行われている。児童虐待を対象とした NPO 法人などの諸団体によれば、子どもの発達に関する親の認知、経済的困窮などの生活問題、不安定な夫婦関係、親の社会的孤立などが虐待の引き金としてあげられている。

虐待を予測するための研究では、子どもの数(育児負担)・解離傾向・気の合わない子どもがいる(子どもに対する不適切な認知)・葛藤性(家族内の暴力傾向)・母性意識否定感(母親の低い自己評価)などが虐待行動への影響要因としてあげられている。これらは諸外国における先行研究とも一致している(大原、2003)。また、数井らによれば、母親の心理的状态や子どもへの行動・態度は、夫との関係のありようと密接に関連している(数井他、1996)。

そこで、本論では NFRJ03 の特性をいかして、家族が抱える生活問題、夫婦関係などに焦点をあて、それらと子どもへの虐待傾向との関連の有無について検討する。

## 3．分析

### 3-1 使用データと変数

本論で用いるデータは NFRJ03 である。NFRJ03 の中の子育てに関する項目が豊富な若年票を用いて分析する。まず、若年票 2524 ケースを用いて子育て意識に関して概観する。次に、虐待傾向を分析するにあたり、配偶関係と子どもの年齢で分析対象を限定した。本論ではひとり親とふたり親の比較は行わず、ひとまず、ふたり親つまり有配偶者のみを分析対象とした。子どもの年齢によって親の虐待傾向は異なると思われるが、サンプル数をある程度確保するために、未子 3 歳以上長子 12 歳以下を分析対象としている。その結果、分析対象は 586 ケース(男性 246 名、女性 340 名)となった。虐待傾向に関する分析で使用する変数について表 1 にまとめた。

本論では、NFRJ03 の養育態度に関する質問項目 10 項目のうち、心理的虐待傾向について焦点をあてる。「児童虐待の防止等に関する法律 第 2 条児童虐待」の定義によれば、心理的虐待とは、「児童に対する著しい暴言または著しく拒絶的な反応、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力その他の児童に著しい心理的外傷を与える言動を行なうこと」であり、「子どもの存在を無視する」、「おびえさせる」、「罵声をあびせる」、「ひどい言葉でなじる」、「むりじいする」、「子どものいるところで繰り返されるドメスティック・バイオレンス」も含まれる。

NFRJ03 の質問項目「子どもを無視すること」と「子どもが傷つくようなことを言うこと」は、ほぼそれに該当しているといえるだろう。そこで、虐待傾向には、「子どもを無視すること」と「子どもが傷つくようなことを言うこと」の合計による変数を作成した。虐待に関する研究では、作成した虐待スケールの得点の高さから、「虐待あり」、「虐待傾向」、「虐待なし」と分けることもある。心理的虐待の例としてしばしばあげられる、上記の例と比較して、本論で用いる「子どもを無視すること」と「子どもが傷つくようなことを言うこと」は、虐待の度合いが低いと考え、この合成変数自体を虐待傾向とした。また、これはあくまでも心理的虐待傾向をさしている。

表 1 使用変数の記述統計

	男性				女性					
	N	最小値	最大値	標準偏差	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差	
養育態度(虐待傾向)	244	2	6	3.102	0.931	339	2	7	3.540	0.979
未子年齢	246	3	12	5.890	2.232	340	3	12	5.979	2.416
同居子数	246	1	4	1.882	0.663	340	1	4	1.874	0.646
本人年齢	246	29	48	39.528	4.354	340	28	47	37.650	4.019
配偶者の健康状態	246	1	5	2.874	0.796	339	1	5	2.717	0.872
健康状態	246	1	5	3.963	0.736	339	1	5	3.832	0.795
家計の状態	245	1	4	2.829	0.721	335	1	4	2.731	0.750
生活全体満足度	245	1	4	2.861	0.618	339	1	4	2.732	0.694
夫婦関係満足度(全体)	243	1	4	3.222	0.596	332	1	4	2.840	0.809
配偶者との間のトラブルやもめごと	243	1	4	1.934	0.898	335	1	4	2.209	0.969
悩みや不安										
子どものことで悩んだこと	246	1	4	1.898	0.886	340	1	4	2.568	0.962
配偶者のことで悩んだこと	246	1	4	1.593	0.860	340	1	4	1.947	1.035
親・義理の親のことで悩んだこと	244	1	4	1.594	0.829	338	1	4	1.893	0.990
「自分が家族に理解されていない」と感じたこと	246	1	4	1.390	0.690	340	1	4	1.662	0.902
家事・育児・介護などでの負担が大きすぎると感じたこと	246	1	4	1.199	0.539	340	1	4	1.944	1.016
家計の先行きについて不安を感じたこと	246	1	4	1.915	1.009	340	1	4	2.406	1.152
職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと	246	0	4	2.020	1.075	339	0	4	1.021	1.193
職場や仕事上で「自分が理解されていない」と感じたこと	246	0	4	1.748	0.900	339	0	4	0.944	1.088
仕事のために家族との時間がとれないと感じたこと	245	0	4	2.143	1.109	339	0	4	1.118	1.277
家族のために仕事の時間がとれないと感じたこと	246	0	4	1.329	0.701	339	0	4	0.799	0.914
家事・育児										
本人家事	241	0	33	3.224	4.712	337	0	33	27.338	5.236
配偶者家事	243	0	33	27.418	5.871	332	0	23	2.623	3.815
本人育児	243	0	13	3.874	3.402	336	0	13	10.774	2.678
配偶者家事	244	0	13	10.867	2.651	337	0	13	3.642	3.495
配偶者からの情緒的サポート	246	3	12	9.711	2.039	338	3	12	8.763	2.402

注 配偶者の健康状態、健康状態、家計の状態、生活満足度、夫婦関係満足度、配偶者との間のトラブルやもめごととは、調査票の選択肢の数値を逆転させた。したがって、値が高いほど健康で、家計にゆとりがあり、生活や夫婦関係に満足し、配偶者との間のトラブルやもめご事は頻出していることになる。夫婦関係満足度は、6 つある質問項目の中から「夫婦関係全体」の満足度を用いた。悩みや不安の中の「親・義理の親のことで悩んだこと」で親がいらない場合は職業に就いていない場合は「0」とし、それ以外の値については、調査票の選択肢の数値を逆転させたので、値が高いほど悩みや不安を感じる頻度が高い。家事・育児に関しては、選択肢「ほぼ毎日」を 6.5、「1 週間に 4~5 回」を 4.5、「1 週間に 2~3 回」を 2.5、「週に 1 回くらい」を 1、「ほとんど行わない」を 0 とし、家事 5 項目、育児 2 項目を合計し 2 変数を作成した。配偶者からの情緒的サポートも「悩み事を聞いてくれる」、「高く評価してくれる」、「アドバイスをしてくれる」の 3 項目を合計した。値が高いほどサポートがある。

### 3-2 子育て意識の男女差

虐待傾向の分析に入る前にまず、子育てに関する男女の立場の違いについて確認しておきたい。表2は、子育て意識を男女別子どもの有無別に集計したものである。子育てについておおむね肯定的に答えているものの、選択肢の一つとなった子どもを持つという選択を積極的に選ぶほど肯定的に考えているものは多いとはいえないだろう。

子どもを持つこと、子育てをすることによって「家族の結びつきが深まる」を「そう思う」としているのは子どものいる男性で81%、子どもがいる女性で73%である。一方、子どもがいない男性では、「そう思う」割合は64%、女性での割合は58%にとどまっている。同様に、「子どもとのふれあいが楽しい」と思っているのは、子どものいる男性で79%、子どもがいる女性で77%である。一方、子どもがいない男性では、「そう思う」割合は61%、女性での割合は57%である。子育てに肯定的な考えをもっている人が子どもを持っている、あるいは子育てをする中で親として成長し肯定的な意識が芽生えているとも考えられる。

「仕事に張り合いができる」「親としての重い責任を感じる」については、子どもの有無では違いがみられない。「仕事に張り合いができる」というのは「そう思う」男性で6割前後、女性ではもっと低い。「親としての重い責任を感じる」のは男女ともに7割を超えている。「子育てを通じて自分の友人が増える」のは男性ではなく子どもがいる女性であり、「子育てを通じて人間的に成長できる」と考えているのも、やはり子どもがいる女性である。一方、「子育てによる心身の疲れが大きい」、「子育てで出費がかさむ」、「自由な時間がもてなくなる」、「仕事が十分できなくなる」、「子育てが大変なことを身近な人が理解してくれない」「社会から取り残されたような気になる」といった子育てに対する悲観的な意識は、むしろ子どもがいない人に多い。実際に子育てをしてみると、さほど悲観した状況には陥らないということの意味するのか、これらの6項目について悲観的な人ほど子どもを持たない傾向にあるのか、おそらくは両者が複合的な形で現れていると思われる。

子育てに関して肯定的な項目についても、否定的な項目についても、多くの項目で子どもの有無にかかわらず男女の違いがみられた。女性の方が「そう思う」を選ぶ傾向がある。つまり、子育てに関する問題は、女性の方が「当事者意識」が強く、自分自身の問題として具体的に考えているが、男性にとっては自分自身の問題として日常的には捉えられていないことの現われではないかと思われる。

では、子育てのサポートについてみてみよう。「急用ができて子どもの世話を頼まなければならないとき」に頼りにする人として、配偶者をあげているのは、有配偶全体では49%であり、男女別にみてもその間に違いはみられない。最も多くの回答者が頼りにしているのは、自分の親で有配偶全体の61%があげている。ついで多いのは、配偶者の親であるが、男性の61%があげているにもかかわらず、女性では45%しかあげていない。自分の兄弟姉妹を頼りにしているのは、男性では13%にすぎないが、女性では22%である。配偶者の兄弟姉妹は男性と女性の間には違いはなく、有配偶全体でも9%と低い。女性は配偶者の親や配偶者のきょうだいよりも、自分の親や自分のきょうだいを頼りになる人として多くあげているのに対し、男性は自分の親やきょうだいと配偶者の親やきょうだいの間に違いはなく、むしろ自分の親をあげる割合よりも配偶者の親をあげる割合の方が、わずかではあるが高い。また、子どもの世話を頼める相手として、その他の親族はほとんどあげられていない。

表2 性別子どもの有無別子育て意識

(%)

			そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わ ない
(ア) 家族の結びつきが深まる	男性	子どもなし	63.8	28.4	2.9	4.8
		子どもあり	80.5	17.3	1.2	1.0
	女性	子どもなし	58.2	35.7	2.1	3.9
		子どもあり	73.0	23.9	2.0	1.1
(イ) 子どもとのふれあいが楽しい	男性	子どもなし	60.8	33.6	2.2	3.5
		子どもあり	79.3	19.7	0.8	0.1
	女性	子どもなし	56.5	35.3	5.8	2.5
		子どもあり	76.8	21.9	1.1	0.3
(ウ) 仕事に、はりあいができる	男性	子どもなし	56.0	33.0	5.4	5.6
		子どもあり	61.9	31.9	4.2	2.1
	女性	子どもなし	40.7	40.4	14.3	4.6
		子どもあり	53.4	36.7	6.7	3.2
(エ) 親としての重い責任を感じる	男性	子どもなし	72.9	23.1	1.1	2.9
		子どもあり	77.7	20.1	1.5	0.7
	女性	子どもなし	76.4	19.6	1.8	2.1
		子どもあり	79.7	17.4	2.0	0.9
(オ) 子育てを通じて自分の友人が増える	男性	子どもなし	34.1	43.0	13.8	9.2
		子どもあり	30.6	42.2	19.5	7.6
	女性	子どもなし	40.4	45.5	10.1	4.0
		子どもあり	61.7	30.0	6.1	2.3
(カ) 子育てを通じて人間的に成長できる	男性	子どもなし	55.7	34.6	5.4	4.3
		子どもあり	58.8	36.6	3.7	0.8
	女性	子どもなし	65.5	28.8	2.5	3.2
		子どもあり	74.1	23.7	1.8	0.4
(キ) 子育てによる心身の疲れが大きい	男性	子どもなし	21.4	44.3	23.8	10.5
		子どもあり	9.4	30.5	37.7	22.3
	女性	子どもなし	33.5	48.4	14.5	3.6
		子どもあり	22.2	41.0	27.2	9.5
(ク) 子育てで出費がかさむ	男性	子どもなし	45.1	44.1	5.9	4.9
		子どもあり	32.4	45.0	16.9	5.7
	女性	子どもなし	50.7	43.9	3.6	1.8
		子どもあり	40.9	46.1	8.8	4.3
(ケ) 自分の自由な時間がもてなくなる	男性	子どもなし	34.4	43.1	15.2	7.3
		子どもあり	16.4	42.2	27.2	14.3
	女性	子どもなし	46.8	45.0	5.4	2.9
		子どもあり	27.8	47.6	16.5	8.1
(コ) 仕事が十分にできなくなる	男性	子どもなし	8.1	19.1	43.9	28.8
		子どもあり	3.3	12.8	38.3	45.6
	女性	子どもなし	37.3	50.2	8.6	3.9
		子どもあり	18.9	43.3	24.4	13.3
(サ) 子育てが大変なことを身近な人が理解してくれない	男性	子どもなし	7.3	14.7	37.2	40.8
		子どもあり	1.8	7.3	39.2	51.7
	女性	子どもなし	6.6	23.0	47.1	23.4
		子どもあり	6.5	18.6	38.1	36.8
(シ) 社会から取り残されたような気になる	男性	子どもなし	4.1	5.7	29.8	60.4
		子どもあり	1.8	3.0	21.6	73.5
	女性	子どもなし	7.6	18.8	37.5	36.1
		子どもあり	6.8	16.4	29.7	47.1

親族以外では友人や職場の同僚が相対的には高く、有配偶全体の19%があげている。男女間に違いがみられ、女性では19%、男性では6%と男性の方が13ポイント低い。親族以外で次に高いのは、近所の人であり、有配偶全体で12%である。近所の人を頼りにしているかどうかでも男女の違いがあり、男性6%、女性15%と女性の方が高い。専門家・機関、サービスなどをあげた回答者は

少なく有配偶全体では8%にとどまる。これも男女差があり男性5%、女性10%で女性の方が高い。

次に、「子どもについての悩みや心配事があるとき」に頼りにする人・機関についての集計をみてみよう。「子どもの世話」とは異なり、相談については、もっとも多くあげられているのは配偶者である。有配偶全体の85%があげている。しかし、男女で違いがあり、男性の90%があげているが、女性は82%にとどまる。つまり、夫が妻を頼りにする割合よりも、妻が夫を頼りにしている割合は低い。自分の親をあげているのは、有配偶全体の55%であるが、男女で違いがある。女性は62%が自分の親をあげているのに対し、男性が自分の親をあげているのは44%に過ぎない。配偶者の親についても男女の違いがある。女性は26%しか配偶者の親を相談相手としてあげていないが、男性は34%が配偶者の親をあげている。自分のきょうだいについても男女差があり、女性は自分のきょうだいをあげる割合は28%であるのに対し、男性は16%にすぎない。男性は配偶者以外には、子どもについての悩みや相談事をする親族が少なく、女性は自分の親やきょうだいを頼りにしているといえよう。また、配偶者のきょうだい、その他の親族などを頼りにしている人はほとんどいなかった。

親族以外についてしてみると、友人や職場の同僚について女性は49%があげているが、男性は20%しかあげていない。男女間で大きな違いがみられる。また、近所の人についても男女差があり、女性は16%があげているが、男性は3%にすぎない。専門家・機関なども同様で、女性の13%があげているが、男性は6%しかあげていない。男性に比べると、女性は親族以外の相談相手がいる傾向がある。

「急用ができて子どもの世話を頼まなければならないとき」に頼る人・機関として最も多くあげられているのは、女性は自分の親、男性は配偶者の親、つまり妻の親がもっとも多くの回答者から頼りにする人としてあげられている。妻の親を頼りにしているのは6割程度にものぼり、配偶者を頼りにしている人の割合よりも高い。友人、近隣、専門家やサービスなどを頼りにしている人は、きわめて少ないが、いずれも男性に比べると女性の方が友人、近隣、専門家やサービスをあげている割合は高い。

「子どもについての悩みや心配事があるとき」に頼る人・機関として最も多くあげられているのは、配偶者である。しかし、配偶者をあげているのは男性では9割近くにのぼるが、女性では8割程度にとどまっている。この項目でも親に頼る人の割合は高いが、女性の場合は、友人を上げる割合はほぼ5割である。それに比べて近隣や専門家・サービスを上げる割合はかなり低い。そして友人、近隣、専門家・サービスいずれについても女性の方が男性よりも、それらを頼るとする割合は高い。

性別役割分業が前提となっている現在の社会において家事や育児へのかかわりが男女では全く異なっていることは知られているが、以上のように、子育てに関する意識も男女で異なり、男性は子育ての当事者としての意識がやや薄い印象が感じられた。その反映として、現在子育てをしている人たちにとって支援となっているのは、主に配偶者と妻の親である。子育てのサポートネットワークも妻中心に形成されていることも推測された。どの項目についても「誰もいない」と回答している者はほとんどいないことから、回答者は何らかのネットワークを持っていることになる。実際にどのネットワークが個人にとって機能しているかを検証した上で養育態度との関連をみていく必要があるが、それは、次の機会に行いたいと思う。

### 3-3 社会的属性と虐待傾向

子育て意識、子育てのネットワークにも男女差がみられたが、虐待傾向も男女で明らかな違いがあった。表3に示したように、女性の方が虐待傾向の得点が高い。これは既存の調査結果とも一致している。女性の方が子育てに多くかかわっているために、女性の方が虐待傾向が強く見えるということである。子育てにおける男女の立場の違いが明らかにあるので、以下の分析では、男女別に分析を行っていく。

次に、学歴、世帯年収による平均値の差の分析をみると、いずれも統計的に有意な違いがないことがわかる(表4)。つまり、何らかの生活問題を抱えやすい階層の人に虐待傾向があるのではなく、あるとすれば、何らかの生活問題を抱えた人に虐待傾向があるのかもしれない。

それは妻の就業や家族類型についても同様である。妻(母親)が就業していることや核家族であることは、虐待傾向とは関連がみられなかった。つまり、妻(母親)が就業していることが必ずしも家族内に緊張をもたらしたり、核家族であることがただちに子育てにおいて親が孤立し、虐待傾向に結びつくわけではないということである。

表3 虐待傾向の性別による平均値の差の検定

	平均値	度数	標準偏差
男性	3.102	244	0.931
女性	3.540	339	0.979
全体	3.357	583	0.982
F	29.483	***	

\*\*\* p < .001, \*\* p < .01, \* p < .05

表4 虐待傾向の学歴、世帯年収、妻就業の有無、家族類型による平均値の差の検定

	平均値	男性 度数	標準偏差	平均値	女性 度数	標準偏差
<b>本人学歴</b>						
中学・高校	3.183	93	1.042	3.643	140	1.087
短大・高専(専門学校含む)	2.917	36	0.806	3.416	149	0.863
大学・大学院	3.097	113	0.866	3.625	48	0.981
全体	3.103	242	0.930	3.540	337	0.982
F	1.068			2.150		
<b>世帯年収3類型</b>						
400万円未満	2.750	24	1.032	3.655	58	1.001
700万円未満	3.194	98	0.949	3.608	130	1.045
700万円以上	3.131	107	0.891	3.447	123	0.916
全体	3.118	229	0.936	3.553	311	0.988
F	2.202			1.216		
<b>妻就業</b>						
妻無職	3.144	97	0.924	3.592	147	0.956
妻有職	3.075	147	0.937	3.500	192	0.997
全体	3.102	244	0.931	3.540	339	0.979
F	0.325			0.731		
<b>世帯構成</b>						
核家族	3.052	174	0.888	3.500	252	0.959
三世帯	3.235	68	1.024	3.639	83	1.019
その他	3.000	2	1.414	4.000	4	1.414
全体	3.102	244	0.931	3.540	339	0.979
F	0.963			1.072		

\*\*\* p < .001, \*\* p < .01, \* p < .05

### 3-4 生活問題・夫婦関係・役割ストレインと虐待傾向

虐待傾向は子どもの年齢と関連し、年齢に適した質問項目が必要となる。末子年齢との相関係数をみたところ、有意な関係にはなかったため、末子年齢を統制変数として用いる必要はないことが確認された(表5)。

同居子との間にも有意な関係がみられなかった。同居子が多い場合に、子育ての負担が大きくなり、虐待傾向が生じるということはここでは推測できない。本人の年齢も関連がみられなかった。

配偶者の健康状態は、女性回答者には関連がみられ男性回答者にはみられなかった。夫の健康状態が悪いと妻は子どもへの虐待傾向が高くなる。夫の健康状態が妻にとっては生活問題やその他の悩みや不安と結びついて、虐待傾向へと向かうのかもしれない。妻の健康状態は、夫にとって生活問題やその他の悩みや不安と結びつくかどうかはここでは分析していないが、少なくとも虐待傾向とは関連していない。本人の健康状態は、男女ともに負の相関関係にある。

生活満足度も女性では虐待傾向との間に有意な関係があるが、男性の場合にはそういった関係はない。しかし、夫婦関係は男女ともに虐待傾向と有意な関連がみられる。配偶者との間のトラブルやもめごとについては、女性では有意に、男性では有意ではない。NFRJ03はカップル調査ではないので正確にはわからないが、配偶者との間のトラブルやもめごとは、そもそも男女間で分布が異なり、男性の方が女性よりも配偶者との間のトラブルやもめごとを少なく回答している。妻にとっては頻発しているトラブルでも夫にとってはトラブルとは認識されていない可能性がある。そのため、

表5 生活問題・夫婦関係などの変数と虐待傾向との相関係数

	男性	女性
末子年齢	-0.062	-0.069
同居子数	0.113	0.071
本人年齢	-0.021	-0.089
配偶者の健康状態	-0.090	-0.180 **
健康状態	-0.193 **	-0.149 **
家計の状態	0.055	0.102
生活全体満足度	-0.070	-0.214 ***
夫婦関係満足度(全体)	-0.228 ***	-0.229 ***
配偶者との間のトラブルやもめごと 悩みや不安	0.119	0.302 ***
子どものことで悩んだこと	0.149 *	0.246 ***
配偶者のことで悩んだこと	0.207 **	0.219 ***
親・義理の親のことで悩んだこと	0.201 **	0.215 **
「自分が家族に理解されていない」と感じたこと	0.244 ***	0.313 ***
家事・育児・介護などでの負担が大きすぎると感じたこと	0.114	0.219 ***
家計の先行きについて不安を感じたこと	0.254 ***	0.221 ***
職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと	0.260 ***	0.012
職場や仕事上で「自分が理解されていない」と感じたこと	0.231 ***	0.049
仕事のために家族との時間がとれないと感じたこと	0.149 *	-0.021
家族のために仕事の時間がとれないと感じたこと	0.174 **	0.056
家事・育児		
本人家事	-0.064	-0.054
配偶者家事	-0.034	-0.178 **
本人育児	-0.056	-0.162 **
配偶者家事	-0.105	-0.106
配偶者からの情緒的サポート	-0.166	-0.336 ***

\*\*\* p < .001, \*\* p < .01, \* p < .05



結果として子どもへの虐待にも結びついていないのかもしれない。

家事や育児の負担以外は、家族内での悩みや不安、役割ストレスは男女ともに虐待と結びついている。役割ストレスの値が高いほど虐待傾向が強い。家計の状態についての項目は有意ではなかったが、家計についての先行き不安という漠然としてみえる項目は虐待傾向と統計的に有意な関係にあった。仕事にかかわる役割ストレスは、男性にとっておそらく大きな緊張をもたらすもので、虐待傾向との相関係数は他の変数と比較するとやや高い。家事や育児の負担が大きいという役割ストレスや実際の育児遂行、配偶者の家事へのかかわりは、女性では虐待傾向と有意な相関関係がみられた。

次に、2変数以上を用いた重回帰分析の結果をみる。男性回答者について、健康状態と夫婦関係満足度を投入したところ、いずれも負の関係がみられた(表6)。つまり、本人が健康ではないほど、夫婦関係に満足していないほど、子どもへの虐待傾向が高くなっている。モデル2以降では、相関関係のみられた悩みや不安の9項目をそれぞれ投入した。これらの項目は、男性では、夫婦関係満足度と相関関係が低かったからである。モデル2以降をみていくと、子どものことや配偶者のことでの悩み、仕事のために家族との時間がとれない悩みは有意な関係がみられなかった。つまり、仕事での悩みや家計の先行き不安により、子どもへの虐待傾向が強まる。最も説明力が高かった職場での仕事の負担の大きさを投入したモデル7でも、調整済み決定係数は.110であるので、全般的に説明力は低く、今後の分析手法やモデルの改善の必要がある。

女性の回答者は、男性回答者とは異なり、生活満足度、夫婦関係満足度、配偶者とのトラブル、配偶者のことでの悩み、配偶者からの情緒的サポートといった一連の説明変数間の相関関係が強い。そこで、モデル2以降、本人の健康状態、配偶者の健康状態以外の変数を一つずつ投入した(表7)。

本人の健康状態と配偶者つまり夫の健康状態は一定した効果がみられないが、いずれも負の係数である。虐待傾向と相関関係がみられた他の項目は全て統計的に有意な影響がみられる。生活に満足していないほど、夫婦に満足していないほど、配偶者、つまり夫との間にトラブルやめごとがあるほど、子どもや家族のことで悩むほど、家事や育児の負担が大きいほど、子どもへの虐待傾向がある。また、夫が家事をしないほど、夫からの情緒的なサポートが少ないほど、子どもへの虐待傾向がある。最も説明力が高いのは、モデル13で、夫からの情緒的なサポートを投入したモデルである。それでも調整済み決定係数は.128であるので、男性の分析と同様、女性についての分析も、改善の必要があるだろう。

表6 虐待傾向に関する重回帰分析(男性回答者)

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5	モデル6	モデル7	モデル8	モデル9	モデル10
健康状態	-.159 *	-.151 *	-.143 *	-.155 *	-.133 *	-.130 *	-.117	-.106	-.140 *	-.138 *
夫婦関係満足度(全体)	-.199 **	-.179 **	-.154 *	-.161 *	-.144 *	-.175 **	-.183 **	-.179 **	-.193 **	-.189 **
悩みや不安		.092								
子どものことで悩んだこと			.114							
配偶者のことで悩んだこと				.143 *						
親・義理の親のことで悩んだこと					.160 *					
「自分が家族に理解されていない」と感じたこと						.214 **				
家計の先行きについて不安を感じたこと							.218 **			
職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと								.167 *		.097
職場や仕事上で「自分が理解されていない」と感じたこと										
仕事のために家族との時間がとれないと感じたこと										
家族のために仕事の時間がとれないと感じたこと										
R <sup>2</sup>	.076 ***	.084 ***	.087 ***	.097 ***	.096 ***	.120 ***	.121 ***	.100 ***	.086 ***	.093 ***
Adj-R <sup>2</sup>	.069	.073	.075	.086	.086	.109	.110	.089	.075	.082
N	240	240	240	238	240	240	240	240	240	240

\*\*\* p < .001, \*\* p < .01, \* p < .05

表 7 虐待傾向に関する重回帰分析(女性回答者)

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5	モデル6	モデル7	モデル8	モデル9	モデル10	モデル11	モデル12	モデル13
健康状態	-.105	-.071	-.108	-.083	-.075	-.081	-.113 *	-.078	-.075	-.075	-.104	-.075	-.069
配偶者健康状態	-.148 **	-.112 *	-.098	-.099	-.132 *	-.114 *	-.122 *	-.101	-.133	-.120 *	-.145 *	-.151 **	-.092
生活満足度		-.167 **											
夫婦関係満足度(全体)			-.198 ***	.269 ***									
配偶者との間のトラブルやもめごと													
悩みや不安													
子どものことで悩んだこと				.218 ***									
配偶者のことで悩んだこと					.181 **		.198 ***						
親・義理の親のことで悩んだこと								.281 ***	.190 ***	.186 **	-.186 **	-.146 **	-.303 ***
「自分が家族に理解されていない」と感じたこと													
家事・育児・介護の負担が大きいと感じたこと													
家計の先行きについて不安を感じたこと													
配偶者家事遂行													
本人育児遂行													
配偶者からの情緒的サポート													
R <sup>2</sup>	.042**	.067 ***	.079 ***	.111 ***	.088 ***	.073 ***	.083 ***	.118 ***	.077 ***	.074 ***	.073 ***	.062 ***	.128 **
Adj-R <sup>2</sup>	.036	.058	.071	.103	.080	.064	.075	.110	.068	.066	.064	.054	.121
N	337	336	329	332	337	337	335	337	337	337	329	333	329

\*\*\* p < .001, \*\* p < .01, \* p < .05

#### 4 . 結論

本論では、親の養育態度の中でも虐待傾向、とくに心理的虐待傾向に着目した。本論の(心理的)虐待傾向に関する分析結果をまとめてみよう。

第一に、虐待傾向は男女で異なり、実態も意識の上でも子育てに深く関わっている女性の方が虐待傾向も強いことが確認できた。男女で子育て意識に違いがみられ、子育てに関しての当事者意識が異なると推測される。男性は子育てを自分の問題として考えている可能性が低く、このような女性と子育て、ならびに子どもとの密着した関係が、虐待傾向の男女差の背景となっていると考えられる。

第二に、次に、学歴、世帯年収による平均値の差の分析をみると、いずれも統計的に有意な違いがないことがわかる(表 4)。つまり、特定の階層の人に虐待傾向があるのではなく、何らかの生活問題を抱えた人に虐待傾向があることがわかった。

第三に、生活問題のうち、家計のゆとりといった現状ではなく、漠然とした家計の将来に対する不安感の方が虐待傾向と結びついていた。現状が苦しくても先がみえていれば不安は少ないと言うことであろうか。逆に言えば、現状に問題がなくても、家計についての先行き不安は家族を緊張状態に陥らせ、それが子どもへの虐待傾向と結びついてしまうのであろう。

第四に、役割ストレーンならびに夫婦関係と虐待傾向が関連していることが明らかとなった。男性は仕事の負担が大きい、職場で理解されていない、家族のことで仕事の時間がとれないことが虐待傾向を強め、夫婦関係満足度が低いほど、虐待傾向が強まる。女性は、子どもや家族のことで悩んだり、家族から理解されていない、家庭内での負担が重いほど、夫からの情緒的サポートが少なく、夫婦関係満足度が低いほど虐待傾向が強い。性別役割分業の中で男女それぞれに課されている負担やストレスが、弱い立場にある子どもに向けられることが示唆される。

虐待に関する研究では、必ず子どもの状態、例えば発達や健康状態などの変数が用いられることが多い。コピーをはじめとして多くの研究者が指摘しているように、因果の向きは確認しにくい(Corby 2000 = 2002)。NFRJ03 には、子どもの健康など状態を示す質問項目はないけれども、この養育態度に関する調査項目は有用な項目であり、さらに興味深い知見が得られる可能性があることが確認された。しかし、本論は探索的な分析にとどまっており、今後、分析対象の再検討、子どもとの関係・夫婦関係・親の心理的状态・養育態度などの諸変数を用いた分析枠組みの再検討が必要であろう。

#### 【文献】

Corby, Brian , 2000, *Child Abuse 2<sup>nd</sup> edition*, Open University Press, Buckingham. (=2002, 萩原重夫訳『子ども虐待の歴史と理論』明石書店.)

石原邦雄編, 2005, 『少子化日本の子産み子育てにおけるジェンダー構造に関する研究』(厚生労働省科学研究費補助金総合研究報告書) .

数井みゆき・無籐隆・園田菜摘, 1996, 「子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について」, 『発達心理学研究』7 : 31-40.

大原美知子, 2003, 母親の虐待行動とリスクファクターの検討 首都圏在住で幼児をもつ母親への児童虐待調査から , 『社会福祉学』43-2 : 46-57.

東京都福祉局, 2001, 『児童虐待の実態 東京の児童相談所の事例に見る 』 .

(<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/syoushi/hakusho/0/index.htm>)

徳永雅子・大原美和子・萱間真美・吉村奏恵・三橋順子・妹尾栄一，2000，「首都圏一般人口における児童虐待の調査」，『厚生指標』47-15号：3-10.